気になったのは若い研究者からの投稿が少く，又反応も少なかったことである。白い表紙の「物性論研究」時代と比べると，周囲の環境の変化と共に，「物性研究」に対する研究者のイメージも相当変ったようである。それは致し方のない事であろう。私が編集委員の一人になってからの「物性研究」に就ての事を昔のことと同様，此処に書く気持は起らない。此辺の事情に就ては松田さんが書かれると聞いた。研究者の数，一般的投稿論文の数の増大等により，ジャーナル，プログレス等の国際的な雑誌にも色々な問題点が出て来ている。information 増大の時期にあって，「物性研究」も今年で発刊１０年になる。よくこれ迄続いて来たものであると一面では考えられるであろう。「物性研究」は今日，昔とは少し異った形で information を読者に提供しているが，もしそれに存在意義があるとすれば，たとえ間違った内容のものであっても，時の，又将来の問題提起につながるような研究論文が気楽な形で投稿される雑誌でありたいと云うのが私の夢である。

後記：専ら記憶に頼り，事実を一つ一つ check する暇がありませんでしたので，間違い，思い違い等があれば御許し下さいます様御願い致します。

〃物性研究〃 創刊

名大・理　長岡洋介

この原稿を書くため，図書室に入って書棚に並んだ物性論研究と物性研究をながめてみた。白い表紙の物性論研究ははじめの東大編集の分はそろっていないが，阪大編集の分は１９４９年から１９５７年３月発行の１０６号まで約９年つづいている。このあと京大編集による黄色い表紙の物性論研究第２集は５年ほどつづく。そして青表紙の物性研究はもう１０年になるわけである。まだ白表紙には及ばないが，黄表紙はとうに越してしまったことになる。創刊当時の事情を思いおこしてみると，よくつづいたものだというのが私のいつわらざる感想である。実のところ，私はもっと早くつぶれてしまうだ

ろうと予測していた。

物性研究の創刊に当ったのは，当時基研のスタッフであった碓井・森・長岡の３人であった。物性論研究が廃刊に至った事情は，要するに論文の投稿が極端に減少し，継続が不可能になってしまったということであったと思う。しかしそこに相当額のお金（30万？）が残ってしまったのである。いわば黒字倒産である。そこでこのお金をどうするかが問題になり，編集部から会員に意見が求められた。その話がコロキウムのあとだったかに編集の責任者であった富田先生から出されたときであったと思う。いっそこの財産を受け継いで新しく，また雑誌を出してはどうかという意見が出たのである。強く主張されたのは松原先生であったと記憶する。その意見にリードされて，基研のスタッスが編集を引き受けるという風に話が進んだのである。

もう一度新しく始めるといっても，物性論研究が廃刊せざるをえなかった事情はなくなっていない。そういうときにまた新しく雑誌を出す目的はなにか，新しい雑誌はどういうものでなければならないか。出すことに私も賛成ではあった。しかし，お金の始末に困ってまず雑誌を出すことが決り，それから雑誌を出す意義を考えるというのは無責任な話ではあるが，私にとってはそういうところがなかったでもない。

雑誌を新しく出すとなると，しなければならないことは少くない。幸い，当時プログレスの編集室にいた須田君が事務を手伝ってくれることになった。三種郵便の認可をとる。そうするには廃刊した雑誌と同じ誌名ではまずいというのが，物性論研究から物性研究への改名の第一の理由であった。物性論という名前からくる理論中心の雑誌というイメージを実験も含む物性物理の雑誌に変えようという哲学は，ここでもあとからついた。表紙を決める。イメージ・チェンジをはかって色も暖色から冷色へ。体裁は素粒子論研究など他グループの雑誌とそろえた。

もちろん，一番大切なのは中味である。どういう雑誌を出そうとしているかをみんなに知ってもらうには，実物を見てもらうのが一番であるということで，とにかく第１号をつくることになった。京都の人たちの意見をおききし，実際に投稿をお願いしてご協力をいただいた。とくに“イイダシベー”の松原先生には講義ノートを書いていただいた。こうしてできたのが創刊号である。その編集後記に雑誌を出す意図が編集部として碓井・森・長岡の連名でまとめられている。この第１号はあとで述べるような理由で散逸してしまい，持っておられない方もあると思うので，その一部をここに引用しておき

たい。

“「物性論研究」が終刊されてただちに「物性研究」を創刊するについては，その刊行の趣旨なり哲学なりを述べる必要がありそうに思います。現在このタイプの雑誌は存在意義を失った，「物性論研究」終刊という事実がその何よりの証拠だという説があります。たしかに「物性論研究」創刊の当時と比べるならば，研究者の数や構成や流動性は大きく変っており，このようなサーキュラーの必要性は減っているかも知れません。しかし，一方では共同利用研究所で主催される研究会は相変らず隆盛であり，その意義はますます高く評価されています。そうであるならば，限られた場所で，限られた人員で行われる研究会の内容を報道し，それを全国のすべての研究者の共有物とすること，さらに進んでは研究会そのものを印刷によって拡大し，すべての研究者が討論に参加できるようにすることも大切なことであると思われます。言うなれば，共同利用研究所ならぬ「共同利用雑誌」として，月刊のサーキュラーの刊行を行う決心をしたのです。”

編集後記では，このあと論文は完成したものというより研究途上のものの討論の場としたいこと，そのほか研究会報告も，講義ノートの掲載，研究体制等の問題についての討論，海外だより，プレプリン案内等の研究情報の交換などを，この雑誌の内容としていきたいと述べている。

第１号は相当沢山（８００部？）つくった。これを宣伝用として，気にいったら購読申込みをしてほしいとの手紙をそえて，これまで物性論研究の会員だった方々，その他気のついた研究者のもとに送った。どれだけ支持が得られるかあまり自信はなかった。私はだめなら資金がきれたところでやめればよいという気であった。幸い，ある程度の購読申込みがあり，一応物性研究は出版がつづくことになったのである。

以上が創刊当時の事情である。私の記憶によったので細かい点であやまりもあるかも知れないが，筋書きはまあこんなものであった。私は約半年編集の仕事をやり，そのあと外国出張に出かけ，帰ってきてすぐ基研をはなれたので，一人の会員・投稿者の立場に変ってしまった。それから１０年の間に，最初私たちの意図したもののある部分は生き，ある部分は変質したと思う。変質したのは，私たちの考えが非現実的であったということであろうか。しかし，こうして私の予測に反して１０年づついたというのは，このような形になった雑誌に，いま理想的な状態にあるとは言えないにしても，それなりの存在意義があることを示しているとみてよいのではなかろうか。もちろん，私以後の

歴代の編集者の苦心と努力がそれを支える力であったことも事実である。

物性研究１０周年に寄せて

九大・理　松田博嗣

先ず「物性論研究」に載せてみる。出した論文に自信がもてれば，英文にしてプログレスかジャーナルに投稿する。 ― 私が大学学部を出た１９５１年頃には，多くの研究者は「物性論研究」をそんな雑誌のように受け止めていたと思います。毎号かなりの投稿があり，当時の物性研究者の数から考えると，「物性論研究」を利用する人の割合は相当高かった ― むしろ物性論研究者の機関誌であったとも云えるでしょう。

１９５３年には，国際理論物理学会が戦後日本での初の国際会議として華々しく開かれましたが，この頃から多くの研究者，殊に固体論の研究者の目はますます海外に惹きつけられた様に思います。それは単なる知識の吸収源としてでなく，自分の研究が海外から認めてもらって国際的に活躍したい。その場として海外を見るようになってきました。実際当時の欧米と日本との研究条件の差，特に経済的な差は絶大なものでした。「物性論研究」に載せて安心してしまって英文にするのを怠けていると損をする。priority を主張出来なかったり，海外から認めてもらえなかったり，idea を取られたりするだろう。それに国内での研究会は頻繁に開かれるようになり，同じ分野の研究者間の討論，交流に事欠かないようになると，ますます研究者は直ちに英文雑誌に論文を投稿するようになってきました。

その結果，こうした主流的ムードからはみ出たような分野の論文が多く載るようになってきました。その頃は高分子物理など，ごく少数派で，その方面の研究発表に「物研」が利用されたことを記憶しています。一時はそんな投稿のため頁数が多くなり過ぎて，編集部よりの注意があったこともありました。しかし，それも風に吹かれて消えるローソクがいっとき明るくなるようなもので，永宮研の編集の後を継がれた山本さん，富田さんの御努力にも関らず，遂に「物性論研究」は毎月出せるような投稿がなくなり，自